

Haemophilus parainfluenzae による尿路感染症から菌血症を来した一症例

◎伊藤 里紗¹⁾、法雲 智美¹⁾、武藤 敏弘¹⁾、宮田 雄次¹⁾、深川 富法¹⁾
岐阜市民病院 中央検査部¹⁾

【はじめに】*Haemophilus parainfluenzae* はヒトの上気道常在菌として存在し、稀に感染性心内膜炎症例等の報告があるが、一般的に侵襲性の低い菌として認識されている。今回我々は、*H. parainfluenzae* による尿路感染症から菌血症を来したと思われる症例を経験したので報告する。

【症例】75歳、男性。腎腫瘍手術目的のため201×年5月22日に当院に入院したが、翌23日において悪寒発熱（体温39.1℃）、および嘔吐が認められたため、血液培養2セットと尿培養および血液検査等が提出された。その際の血液検体所見は、CRP 0.07mg/dl、WBC 4670/ μ l、血小板 21.0×10^4 / μ l、尿一般検査は白血球反応（3+）潜血反応（2+）、細菌（2+）であった。

【細菌培養結果】採取された血液培養は2セット中、好気用ボトル2本が陽性となり、グラム染色でグラム陰性短桿菌を認めた。同時に実施した血液培養液処理による質量分析装置（microflex LT : MALDI Biotyper 3.1）での解析で、*H. parainfluenzae*（score 1.704）が同定された。サブカルチャー後のコロニーでの解析も同菌になった。尿のグラム染色では、血液培養と同様の形態の菌が4+認められたが、ルーチンで使用しているM58/ドリガル（栄研化学）には、何ら有意な菌の発育は認めなかった。そのため、その間冷蔵保存してあった尿沈渣を数日後チョコレート寒天培地（日本BD）とブルセラHK寒天培地（極東製薬）に塗布し、それぞれ炭酸ガス培養と嫌気培養を追加実施した。その結果、チョコレート寒天培地にわずか1コロニーのみ発育が認められ、質量分析装置による解析により *H.*

parainfluenzae と同定された。1コロニーの発育しか認められなかったのは、数日間の保管により菌が死滅したことが考えられた。

【考察】*H. parainfluenzae* による感染性心内膜炎、菌血症は、抜歯等口腔内病変が発端になることが多いとされているが、今回の症例は、尿路感染から菌血症に至ったものと思われた。一般的に尿培養では、XV因子を含む培地は使用されていないため、*Haemophilus* 属等の検出は困難である。そのため、稀とは思われるがこれらの菌による尿路感染症が見逃される恐れがある。尿のグラム染色で特徴的な菌形態を認めた際には、速やかに適した発育条件、培地を追加し検査を進めることの重要性を再認識した菌血症の一例であった。

（岐阜市民病院 中央検査部 058-251-1101
内線 4011）